

日本性科学会雑誌

JAPANESE JOURNAL OF SEXOLOGY

VOL.33 NO.2 Sep. 2015

第35回 日本性科学会学術集会

「性のディスクールを超えて」

理事長講演	日本性科学会のあゆみ	大川 玲子
		座長 石原 理
特別講演	民俗生殖理論と性	栗田 博之
		座長 石原 理
教育講演	性機能と骨盤臓器脱 (POP) -手術療法を中心に-	永田 一郎
		座長 岡垣 竜吾
シンポジウムⅠ	『コミュニケーションとしての性を教える』	座長 金子由美子
	包括的セクシュアリティ教育における「コミュニケーション」	田代美江子
	なぜ、いま、生きる力を育む性教育が求められているのか	岩室 紳也
	心地よさを伝えるコミュニケーションが性を育む	やまがたてるえ
	性感染症予防は2つのコミュニケーションから	高橋 幸子
シンポジウムⅡ	『エ・アロール ~ 中高年からの性を謳歌する』	座長 堀口 貞夫
		指定発言 浜野 佐知
	前立腺とセクシュアリティ	永井 敦
	もっと知ってほしい自分の、相手の、「からだと心」。	
	年はとっても大切な生と性。	堀口 雅子
	中高年の性—アンケートと臨床現場から	金子 和子
	中高年の性的活動性	岡垣 竜吾
一般演題Ⅰ		座長 中塚 幹也
一般演題Ⅱ		座長 永尾 光一
一般演題Ⅲ		座長 北村 邦夫

日本性科学会
Japan Society of Sexual Science

主催 日本性科学会 (JSSS)

JAPAN SOCIETY OF SEXUAL SCIENCE

第35回

日本性科学会学術集会

会 長：石原 理（埼玉医科大学産科婦人科学教室 教授）

会 期：2015 年 10 月 10 日（土） 第16回日本性科学連合性科学セミナー
10 月 11 日（日） 第35回日本性科学会学術集会

会 場：埼玉県県民健康センター（埼玉県さいたま市浦和区仲町3-5-1）

学術集会事務局

〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38
埼玉医科大学産科婦人科学教室

TEL：049-276-1347

E-mail：jsss35@saitama-med.ac.jp

大会 HP URL：http://jsss35.kenkyuukai.jp/



会長挨拶

石原 理

埼玉医科大学 産科婦人科学教室 教授

埼玉医科大学総合医療センター産婦人科 教授

このたび、第35回日本性科学会学術集会の御世話をさせていただくことになりました。歴史ある本学会を埼玉県で開催できることは、大きな喜びであり皆様の多大なるご支援、ご援助に心から感謝しております。

さてこの領域を主たる活動の場としてこなかった私が、本学術集会を企画することで貢献できるとすれば、おそらくいつもと少し異なるパースペクティブで、考えることだと思いつきました。そして、私の周囲にいる有能で個性的なスタッフが智慧を集めて企画したのが、このプログラムです。少しいつもと様子が異なりとお感じになるかもしれません。

今回、さまざまな性のディスカールを、必ずしも権力や制度との関連ばかりでなく、また分節化するだけでなく学際統合的なアプローチを用いることにより、目前にありのままに露出することを目指そうといたしましたが、実践はなかなか難しいといわざるを得ません。そのあたりの企画側の限界感、未達成感をご批判いただきながら、講演などの企画をお楽しみ頂ければ、有り難く存じます。

特別講演は、ニューギニアをフィールドとして研究をすすめられてきた文化人類学者の栗田博之東京外語大学教授に、異なる観点からの「性」についてご講演いただきます。また、大川玲子理事長には、今回特にお願ひし、本学会の歴史的あゆみについてご講演いただきます。私どもの永年の手術指導者である永田一郎埼玉医大客員教授には、骨盤臓器脱手術への取り組みから得られた性機能への影響をお話いただきます。さらに、2つのシンポジウムは、埼玉医大の担当者から座長およびシンポジストの先生にご相談し、それぞれ念入りに企画がなされたものです。

本学術集会において、性における自己への配慮の大切さ、また、性のヒエラルキーが現に存在することなどを認識しながら、さまざまなお話を伺い議論を深めつつ、参加される皆様一人一人がどこかで未来を拓くきっかけを見つけ出すお手伝いができればと思う次第です。

皆様ようこそ埼玉へお越しくださいました。

交通案内

■ 埼玉県県民健康センター

〒330-0062

埼玉県さいたま市浦和区仲町3-5-1

TEL:048-824-4801

JR 浦和駅（西口）から

県庁通りを西へ約800メートル
徒歩約10分

JR 中浦和駅（西口）から

県道40号を東へ約1,100メートル
徒歩約13分

JR 武蔵浦和駅（東口）から

国道17号を北へ約1,700メートル
徒歩約20分

※ 駐車場はございません。

お車でのご来場はご遠慮下さい。



■ 電車

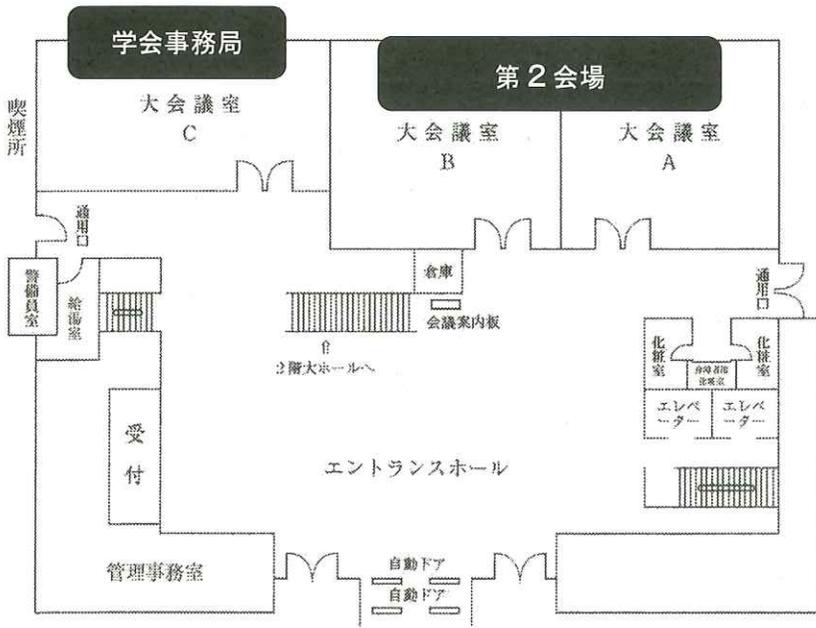
東京 ⇒ 浦和	JR 上野東京ライン・宇都宮線・高崎線 26分
大宮 ⇒ 浦和	JR 宇都宮線・高崎線・湘南新宿ライン 7分
新宿 ⇒ 浦和	JR 湘南新宿ライン 30分
羽田空港 ⇒ 品川 ⇒ 浦和	京浜急行で品川まで15分、 品川でJR東海道本線に乗換、浦和まで33分

■ エアポートリムジン

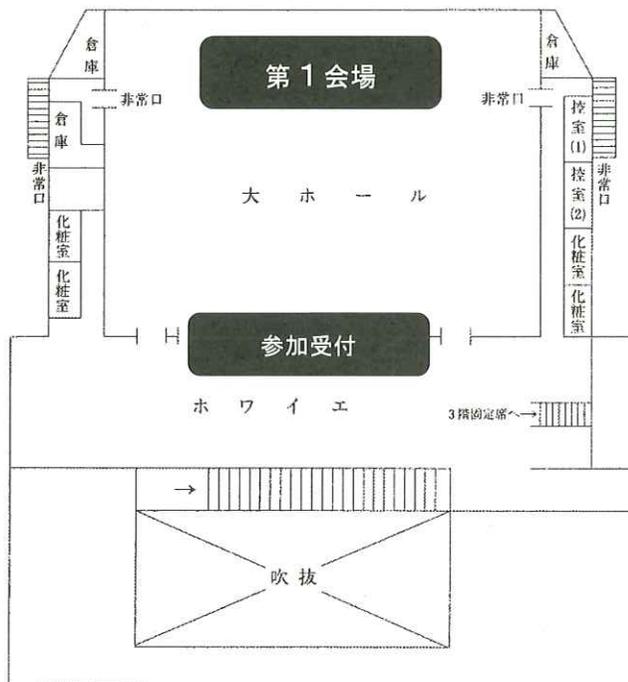
羽田空港 ⇒ 浦和駅西口	約70～110分
羽田空港 ⇒ 武蔵浦和駅西口	約55～95分

会場案内

1 階



2 階



お知らせ

■参加者の皆様へ

1. 参加受付

参加の受付は開催当日に行います。

(1) 日 時：10月10日（土） 12：30 ～第16回日本性科学連合性科学セミナー

10月11日（日） 8：30 ～第35回日本性科学会学術集会

(2) 場 所：埼玉県民健康センター

埼玉県さいたま市浦和区仲町3-5-1

(3) 参加費：

①10月10日（土）第16回日本性科学連合性科学セミナー 3,000円（学生1,000円）

②10月11日（日）第35回日本性科学会学術集会 5,000円（学生1,000円）

③ ①、②両日参加の場合 7,000円（学生2,000円）

④10月10日（土）合同懇親会 5,000円

※現金決済のみの対応となります。

※学生の方は学生証をご提示下さい。

※参加証（ネームカード）は会期中の会場内では必ずお付け下さい。

(4) 抄録集：1,000円 会員の方は、事前に送付されます抄録集をご持参ください。

(5) 日本産科婦人科学会専門医研修出席証明

日本産科婦人科学会会員に限り、e医学会カードによる出席証明のシステムを利用いただけます。

e医学会カードをお忘れの会員には、研修出席証明のシールをお渡ししますので、ネームカード参加証を持参し、記帳の上、お受取りください。

2. 懇親会

第16回日本性科学連合性科学セミナーと第35回日本性科学会学術集会の合同懇親会を下記のとおり予定しております。

(1) 日 時：10月10日（土）17：30 ～ 19：30

(2) 場 所：埼玉県民健康センター 1階 会議室C

(3) 参加費：5,000円

※参加のお申込は、学会参加登録時に受付にてお願いいたします。

※場所は当冊子内の地図をご確認下さい。

3. 理事会

(1) 日 時：10月11日（日）12：00 ～ 13：00

(2) 場 所：学会事務局（1階 会議室 C）

4. 駐車場

会場に駐車場はございません。周辺駐車場の割引もございません。

5. 撮影について

会場内での録音、写真撮影、ビデオ撮影などはご遠慮下さい。

■シンポジウム座長の方へ

1. 講演開始の1時間前までに、受付をおすませ下さい。
2. 所定の時刻に、学会事務局(1階 大会議室 C)にお集まり頂き、座長及び演者の方々に事前の打ち合わせをお願い致します。
3. 講演開始の10分前までに各会場へお越し頂き、進行係にお申し出ください。
4. 進行は時間厳守でお願い致します。
5. 演者の方々の御略歴は抄録集に掲載しております。事前の打ち合わせでもご確認頂きたくお願い申し上げます。

■一般演題の座長の方へ

1. 講演開始の30分前までに、受付をおすませ下さい。
2. 講演開始の10分前までに各会場へお越し頂き、進行係にお申し出ください。
3. 進行は時間厳守でお願い致します。

■シンポジウム演者の方へ

1. 講演開始の1時間前までに、受付をおすませ下さい。
2. 所定の時刻に、学会事務局(1階 大会議室 C)にお集まり頂き、座長及び演者の方々に事前の打ち合わせをお願い致します。
3. 発表用のデータは、30分前までに発表会場の担当者へお渡しください。
なお、当日会場での修正はできませんのでご了承下さい。
4. 発表は PC【PowerPoint】によるプレゼンテーションのみとさせていただきます。
5. 発表データに関しましては「発表データ作成について」をご確認下さい。

■一般演題演者の方へ

1. 講演開始の30分前までに、受付をおすませ下さい。
2. 発表用のデータは、30分前までに発表会場の担当者へお渡しください。
なお、その場で修正はできませんのでご了承下さい。
3. 口演の発表は PC【PowerPoint】によるプレゼンテーションのみとさせていただきます。
4. 発表時間6分、質疑応答2分です。

5. 発表データに関しましては「発表データ作成について」をご確認下さい。

■発表データ作成について

1. 会場には Windows 7/Microsoft PowerPoint 2013がインストールされたパソコンを用意致します。
2. 発表データはMicrosoft PowerPoint 2007以上のバージョンにて作成・編集をお願い致します。
3. 文字化けを防ぐために、フォントは Windows 7に標準搭載されているものをご使用下さい。(個人でインストールされたフォントには対応できません)
4. 動画ファイルを使用する場合はあらかじめ事務局へご相談下さい。
5. 音声出力が必要な方は、あらかじめ事務局までお申し出ください。
6. Machintosh でのプレゼンテーションをご希望の場合は PC本体(ノートパソコン)と ACアダプタ、変換コネクタをお持ち下さい。
7. 発表データはメディア(USBメモリー、CD-R)でお持ち下さい。なお、作成して頂いたデータには「セッション名 _ 筆頭演者名」の順でファイル名をつけて保存して下さい。講演終了後、お預かりしたデータは事務局にて責任を持って破棄いたします。バックアップとして予備のデータをお持ちいただくことをお勧めします。
8. 発表当日、演台にはモニター、キーボード、マウス、ワイヤレスプレゼンター(ポインター付)を準備致します。操作は発表者ご自身でお願い致します。

■発表される方へ

発表に際しては、必ず、倫理的配慮をお願いします。開示すべきCOI状態がある場合は、パワーポイント上で開示をお願い致します。

■質問される方へ

1. 質問あるいは意見のある方は、座長からの指名を受けて下さい。
2. ご所属とお名前を述べてからご発言ください。
3. 時間の節約のため、あらかじめ、できるだけマイクの近くまでお越しください。

■報道機関へのお願い

1. 取材にあたっては、研究大会事務局の許可が必要です。あらかじめ許諾をお求め下さい。書式は、学会のHP上からダウンロードできます。
URL: [http:// jsss35.kenkyuukai. jp/](http://jsss35.kenkyuukai.jp/)
2. 取材当日は受付で、誓約書にご署名をお願いします。
3. 社員証を提示し、名刺をご提出ください。

4. 運営事務局にて配布する取材規定を遵守下さい。
5. 規定に違反した場合、入場のお断り、または退場を命ずる事があります。
6. 一般参加者に対するインタビューは原則禁止いたします。
7. 取材中はプレス証を常に身につけて下さい。

お問い合わせ

第35回日本性科学会事務局

〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38

埼玉医科大学 産科婦人科学教室

TEL:049-276-1347 FAX:049-294-8305

E-mail: jsss35@saitama-med.ac.jp

大会ホームページ URL: <http://jsss35.kenkyuukai.jp/>

日 程 表 10月10日(土) 第16回日本性科学会連合性科学セミナー

時 間	1F 会議室 A+B	1F 会議室 C
12:30～	参加受付	
13:00～17:00	性科学セミナー 「常識化している性の非常識」	性科学セミナー 控室
17:30～19:30		日本性科学会、性科学セミナー 合同懇親会

日 程 表 10月11日(日)

第35回日本性科学会学術集会

時 間	第1会場	第2会場	事務局
	2F 大ホール	1F 会議室 A+B	1F 会議室 C
8:30～	参加受付		
8:55～9:00	開会の辞		
9:00～	一般演題Ⅰ 9:00-9:24	一般演題Ⅱ 9:00-9:32	
9:30～10:00	教育講演 「性機能と骨盤臓器脱(POP) -手術療法を中心に-」	一般演題Ⅲ 9:32-10:12	シンポジウムⅠ 打合せ 9:30-10:00
10:00～10:30	理事長講演 「日本性科学会のあゆみ」		
10:30～12:00	シンポジウムⅠ 「コミュニケーションとしての 性を教える」		
12:00～13:00			理事会
13:00～14:00	特別講演 「民俗生殖理論と性」		シンポジウムⅡ 打合せ 13:00-13:30
14:00～15:30	シンポジウムⅡ 「エ・アロール ～ 中高年からの性を謳歌する」		
15:30～15:40	次期会長挨拶、閉会の辞	第二回 GID エキスパート研修会	
～17:00		(GID 学会主催)	

第 35 回

日本性科学会学術集会プログラム

「性のディスクールを超えて」

8 : 55~9 : 00 開会の辞

学会長：石原 理（埼玉医科大学産科婦人科）

9 : 00~9 : 24 一般演題 I

座長 中塚幹也（岡山大学大学院保健学研究科）

1. 新生仔雌マウス脳での遺伝子発現解析による性別違和（性同一性障害） 関連遺伝子の探索

○仲地 豊¹⁾、伊関美緒子¹⁾、横尾友隆²⁾、水野洋介³⁾、岡崎康司^{1) 3)}

¹⁾ 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター トランスレーショナルリサーチ部門

²⁾ 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター 実験動物施設

³⁾ 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター ゲノム科学部門

2. 慈愛会今村病院泌尿器科における性同一性障害外来の現況

○内田洋介

慈愛会今村病院泌尿器科

3. 性同一性障害小児の自覚と、大人のかかわり

○田中里湖、田中絵里緒

9 : 00~9 : 32 一般演題 II

座長 永尾光一（東邦大学医学部泌尿器科、東邦大学医療センター大森病院リプロダクションセンター）

4. Aging が性的活動、勃起機能、性的自信に及ぼす影響 —日本人男性 7710 人におけるインターネット調査による横断的研究—

○木村将貴¹⁾、永尾光一²⁾、寺井一隆¹⁾、斎藤恵介¹⁾、井手久満¹⁾、武藤 智¹⁾、
山口雷蔵¹⁾

¹⁾ 帝京大学医学部附属病院泌尿器科、²⁾ 東邦大学大森病院リプロダクションセンター

5. フラクショナル炭酸ガスレーザーによる閉経関連性器尿路症候群 (Genitourinary Syndrome of Menopause-GSM-) の治療 (第 1 報)

○関口由紀、中村綾子、槍沢ゆかり、大林美貴、矢尾正祐

女性医療クリニック LUNA グループ・LUNA 骨盤底トータルサポートクリニック、
横浜元町女性医療クリニックLUNA、横浜市立大学大学院医学部泌尿器病態学講座

6. 二分脊椎男性のセクシュアリティ

○道木恭子¹⁾、小野敏子²⁾、土居悦子²⁾、野田洋子³⁾、足立久子⁴⁾

¹⁾ 帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科、²⁾ 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科、

³⁾ 摂南大学看護学部、⁴⁾ 岐阜大学医学部看護学科

7. Persistent Genital Arousal Disorder (PGAD) の一例

○早乙女智子

神奈川県立汐見台病院産婦人科

9 : 32~10 : 12 一般演題Ⅲ

座長 北村邦夫 (一般社団法人日本家族計画協会)

8. 集団保健指導 (性教育講演会) の重要性と成果

○金子明美

公立高等学校養護教諭

9. ライフサイクルをみすえた生と性健康教育を目指して

○山崎真子

松田ウイメンズクリニック

10. 看護学生における同性愛者に関する意識調査

Nursing Students' Attitudes towards Homosexuality

○TU Yi-Ning¹⁾, SUZUKI Kazuyo²⁾

¹⁾Department of Human Health Science School of Medicine, Kyoto University

²⁾Midwifery School of Aichi Medical Association

11. 妊孕性や生殖医療に関する教育に対する養護教諭の意識

○山縣未佳¹⁾、大廣香織¹⁾、長本摩耶¹⁾、難波早織¹⁾、中塚幹也^{2) 3) 4)}

¹⁾ 岡山大学大学院保健学研究科博士前期課程、²⁾ 岡山大学大学院保健学研究科、

³⁾ 岡山大学病院産婦人科、⁴⁾ 岡山県不妊専門相談センター

12. HPV ワクチンに関する大学生の意識と報道の影響

○吉村沙耶佳¹⁾、花口裕美¹⁾、横田 泉²⁾、肥後沙也子²⁾、嶋田雅子²⁾、林田桃子²⁾、
薬師地仁美²⁾、宮崎寛子³⁾、吉海歩実³⁾、片岡久美恵⁴⁾、中塚幹也^{4) 5)}

¹⁾ 岡山大学病院看護部、²⁾ 岡山大学大学院保健学研究科博士前期課程、³⁾ 倉敷平成病院看護部、

⁴⁾ 岡山大学大学院保健学研究科、⁵⁾ 岡山大学病院産婦人科

9 : 30~10 : 00 教育講演

座長 岡垣竜吾 (埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター)

性機能と骨盤臓器脱 (POP) —手術療法を中心に—

○永田一郎、岡垣竜吾、佐藤加寿子、仲神宏子、新澤 麗、石原 理
(埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター)

10 : 00 ~ 10 : 30 理事長講演

座長 石原 理 (埼玉医科大学産科婦人科)

日本性科学会のおゆみ

大川玲子 (日本性科学会理事長)

10 : 30 ~ 12 : 00 シンポジウム I

「コミュニケーションとしての性を教える」

座長 金子由美子 (公立中学校養護教諭・『季刊セクシュアリティ』副編集長)

1. 包括的セクシュアリティ教育における「コミュニケーション」

田代美江子 (埼玉大学教育学講座)

2. なぜ、いま、生きる力を育む性教育が求められているのか

岩室紳也 (ヘルスプロモーション推進センター・オフィスいわむろ)

3. 心地よさを伝えるコミュニケーションが性を育む

やまがたてるえ (NPO法人JASH 日本性の健康協会)

4. 性感染症予防は2つのコミュニケーションから

高橋幸子 (埼玉医科大学地域医学・医療センター)

13 : 00 ~ 14 : 00 特別講演

座長 石原 理 (埼玉医科大学産科婦人科)

民俗生殖理論と性

栗田博之 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院 (文化人類学))

14 : 00 ~ 15 : 30 シンポジウム II

「エ・アロール ~ 中高年からの性を謳歌する」

座長 堀口貞夫 (主婦会館クリニック) 指定発言 浜野佐知 (映画監督)

1. 前立腺とセクシュアリティ

永井 敦 (川崎医科大学泌尿器科)

2. もっと知ってほしい自分の、相手の、「からだと心」。

年はとって大切な生と性。

堀口雅子（女性成人病クリニック、主婦会館クリニック）

3. 中高年の性—アンケートと臨床現場から

金子和子（日本性科学会カウンセリング室、主婦会館クリニック）

4. 中高年の性的活動性

○岡垣竜吾、永田一郎、佐藤加寿子、仲神宏子、新澤 麗、石原 理

（埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター）

15：30～15：35 次期会長挨拶

天野俊康（長野赤十字病院第一泌尿器科）

15：35～15：40 閉会の辞

学会長 石原 理（埼玉医科大学産科婦人科）

第16回 JFS 性科学セミナー

- 日時：10月10日（土）13時～17時
- 会場：埼玉県県民健康センター 1階会議室 A+B
（埼玉県さいたま市浦和区仲町 3-5-1）
- 参加費：3000円（学生 1000円）
- テーマ：常識化している性の非常識

■プログラム

13:00～13:10 開会挨拶 日本性科学連合会長 大川 玲子

[講演] 座長：齋藤 益子（帝京科学大学医療科学部看護学科）

- 13:10～13:35 ①「あれも、これも、常識化している性の非常識」
北村 邦夫（一般社団法人日本家族計画協会）JFPA
- 13:35～14:00 ②「第2次性徴ー男と女のターニングポイント!？」
池上 千寿子（NPO 法人ふれいす東京）JASE
- 14:00～14:25 ③「オーラルセックスと感染症・・・すでに常識なのか？」
濱砂 良一（産業医科大学医学部泌尿器科学）JSSTI
- 14:25～14:50 ④「科学にならない「包茎」」
岩室 紳也（ヘルスプロモーション推進センター〔オフィスいわむろ〕）JSA
- 14:50～15:10 講演①～④の質疑応答（20分）
- 15:10～15:25 休憩（15分）

[講演] 座長：高波 真佐治（東邦大学医療センター佐倉病院泌尿器科）

- 15:25～15:50 ⑤「本邦の医学部における性医学教育の現状」
白井 雅人（順天堂大学医学部附属浦安病院泌尿器科）JSSM
- 15:50～16:15 ⑥「性依存症加害者の性行動の実態」
榎本 稔（榎本クリニック/日本「性とこころ」関連問題学会）JFSHM
- 16:15～16:40 ⑦「認知行動療法の視点から見た性の非常識」
石丸 径一郎（東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース）JSSS
- 16:40～17:00 講演⑤～⑦の質疑応答（20分）

第 35 回

日本性科学会学術集会

抄録集

理 事 長 講 演

「日本性科学会のあゆみ」

日本性科学会理事長

大川玲子

座長 石原 理

埼玉医科大学産科婦人科

日本性科学会のあゆみ

大川玲子

日本性科学会理事長

日本性科学会の前身、日本セックス・カウンセラー・セラピスト協会（Japan Association of Sex Counselors and Therapists; JASCT）は1979年に設立された。米国で Masters & Johnson の性治療を学んできた野末源一らが、性医学をアカデミックなものとして日本に普及、定着させようという活気的な試みである。初代会長は阿伎留病院院長（当時）馬島季麿（1911-1983）、その後松本清一、野末と続き、2006年から演者が担当している。1970年代はまた、国内外に性に関わる活動や団体が次々に発足した時期でもあった。

当初10回の性カウンセリング・セミナーを開催、その参加者を中心に学会を結成した。筆者も情報を得てセミナーに参加し、国内外で研究・診療する諸兄姉の、産婦人科学会では聞けない講義に耳を傾けた。会員数175名の当時の名簿を見ると、東福寺英之、小此木啓吾、河野友信、長田尚夫、奈良林祥など錚々たるメンバーが並ぶ。数少ない性科学者も各界にパイオニアがおり、そのほとんどが参集していたことがわかる。その後は年1回の学術集会を開催し、今日に至るが、学会会長は産婦人科、泌尿器科、精神科、看護など多彩である。JASCT はまた専任の臨床心理士をおき、性治療を行うと同時に学会員への教育にあたった。現在の日本性科学会カウンセリング室である。

1995年、性科学を掲げる5団体共同で第12回世界性科学会（WAS）を開催。これを機に名称を日本性科学会と改め、性科学を広く研究の対象とする学会に変貌した。また5団体（日本性科学会、日本性機能学会、日本性教育協会、日本家族計画協会、日本思春期学会）は、それぞれ異なる性科学の活動分野を結集して性科学を活性化し、また国際学会への窓口ともなる、日本性科学連合を立ち上げた。

近年、日本性科学会には、性同一性障害を専門とする精神科医ほか、多彩な会員がおり、会員数は304名と微増ながら、各会のニーズに応える専門家集団を目指している。

理事長講演

【プロフィール】

現職： 国立病院機構千葉医療センター 産婦人科非常勤医師

千葉きぼーるクリニック婦人科

日本性科学会 理事長

千葉性暴力被害支援センターちさと 理事長

1972年 千葉大学医学部卒業 同年 千葉大学医学部産婦人科学教室入局

千葉大助手、エール大学留学 千葉市立病院 などを経て 2013年 17年勤務した千葉医療センター 停年退職。この間、千葉市立病院で開設した 性治療外来を千葉医療センターでも継続し、現在に至る。2006年より日本性科学会理事長 2014年より「ちさと」理事長

特別講演

「民俗生殖理論と性」

東京外国語大学大学院総合国際学研究院（文化人類学）

栗田博之

座長 石原 理

埼玉医科大学産科婦人科

民俗生殖理論と性

栗田博之

東京外国語大学大学院総合国際学研究院（文化人類学）

文化人類学は、社会的再生産に不可欠な「性－生殖」の問題を世界各地の社会がそれぞれどのように扱っているかを明らかにしてきた。「性」に関しては、どのような男女のペアが性関係に入ることを社会的に承認するかという問題を巡って婚姻論を展開し、「生殖」に関しては、親子関係に基づく社会関係がどのように形成されるかという問題を巡って親族論を展開してきた。このように婚姻（夫婦関係）と親族（親子関係）は明確に区別される領域となるはずであるが、奇妙なことに、「婚姻」を性でなく生殖で定義すべきだという見解が存在する。性が不在の夫婦関係に基づき、擬制的親子関係が形成される事例が世界各地から報告されているからである。この見解によれば、子供の父親と母親を夫婦と定義し、必ずしもそこに性関係を読み込む必要はないということになる。この一見奇妙な論理は、「性－生殖」が因果関係にある（性＝原因：生殖＝結果）ことを考えれば、それ程理解が困難なわけではない。また、これとは逆に、現代社会においては、避妊技術により性を生殖と切り離すことが容易になった結果、性のみで夫婦関係を考えようとする傾向が強まっている。いずれにせよ、「性－生殖」が因果関係にあることは人類に普遍的な事実として、誰もが当然のこととして受け入れているという点には疑問の余地がないように見える。然るに、文化人類学者によって、この事実を受け入れていない社会、性交と妊娠の因果関係を否定するかに見える民俗生殖理論を持つ社会の存在がオセアニア地域から報告されてきた。「父親と母親と子供」という社会的再生産の基本ユニットが認定されていない社会が存在するとなると、これは一大事である。そのため、この報告の真偽を巡って、文化人類学者の間で「処女懐胎論争」と呼ばれる激しい論争が行われた。この論争を振り返りながら、このような民俗生殖理論をどのように解釈すべきか、論じてみたい。

特別講演

【プロフィール】

1954年（昭和29年）横浜生まれ。1978年（昭和53年）東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒業。1985年（昭和60）東京大学大学院社会学研究科文化人類学専門課程博士課程退学（必修単位取得済）。文化人類学専攻。1982年以来、パプアニューギニアで計4回、通算27ヶ月の現地調査を実施してきた。現在、東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授兼総合情報コラボレーションセンター長。日本学術振興会奨励研究員、財団法人民族学振興会研究員、東北学院大学専任講師、東北学院大学教養学部助教授、東京外国語大学外国語学部助教授を経て、1999年より現職。主な著作に、『異文化の解読』（共著、平河出版社）、『家族の自然と文化』（共著、弘文堂）、『性の民族誌』（共著、人文書院）、『洗練と粗野』（共著、東京大学出版会）、『オセアニア・オリエンタリズム』（共著、世界思想社）、などがある。

教育講演

「性機能と骨盤臓器脱（POP）－手術療法を中心に－」

埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター

永田一郎

座長 岡垣竜吾

埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター

性機能と骨盤臓器脱 (POP) —手術療法を中心に—

永田一郎、岡垣竜吾、佐藤加寿子、仲神宏子、新澤 麗、石原 理
 埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター

性交機能を調べるために国際的に認証された質問表には Pelvic Organ Prolapse/Incontinence Sexual Questionnaire (PISQ)と Female Sexual Function Index (FSFI)があるが、これらを用いたデータは未だ少ない。質問表の内容は性交の頻度、性的興奮の程度、オルガスムスの有無、など極めて具体的な質問で構成されており、スコア化されている。演者は今年4月からPOP患者で性活動(+)例にPISQをこころみているが、質問対象者が少ないこと、質問内容がわが国の対象者には解答しにくい項目が多いこと、などからデータ入手に難渋している。Tokら(2010)はPISQ-12(12の質問)でPOP(-)例とPOP(+)例を比較し、性的欲望、オルガスム、性的興奮、性的満足度には優位差はなく、性交中の尿失禁とその不安、POPによる性交拒否には優位差があり、パートナーの勃起力、早漏にも優位差があったとしている。Lavine(2004)は性慾を四つの要因(1. 生物学的、2. 心理学的、3. 人間関係的、4. 社会文化的)に分類しているが、POPのような性器の解剖学的病変は生理学的要因の障害にはじまり、心理学的障害、夫婦間の人間関係にいたる性慾障害に発展するとしている。それ故POPの解剖学的改善は性活動の各種要因の改善に直結する。

POPの発生年代では加齢現象による性機能障害も生じうるため、POPを有する女性で健全な性の営みを続ける例は少ないが、高齢者でも女性としての尊厳を保つ上でPOPの修復の際に性交機能を温存する意義は大きい。一方、性交機能の温存と再発の可能性は表裏一体である。演者は過去50年この点に関する世界の流れをみてきたが、未だ解決策を見ていない。POP手術の究極の目的はこの難題の克服にある。

POPには様々な病型があり、適用手術術式も多岐にわたる。いずれの術式でもLavineの要因2~4は解決可能であるが、解剖学的要因の改善状況は手術の仕方により異なってくる。演者らはglobal standardとされている各術式を取り入れているのでこれらを動画で供覧し、それぞれの長短と術後の性交障害回避のため工夫点を述べ、各術式の個別化に言及する。

教育講演

【プロフィール】

学歴

- 昭和 29 年 3 月 栃木県立大田原高等学校卒業
- 昭和 35 年 3 月 千葉大学医学部卒業
- 昭和 40 年 3 月 千葉大学大学院医学研究科修了

職歴

- 昭和 42 年 4 月 成田赤十字病院産婦人科部長
- 昭和 53 年 4 月 防衛医科大学校産科婦人科学講座講師
- 昭和 55 年 4 月 防衛医科大学校産科婦人科学講座助教授
- 昭和 58 年 4 月 マサチューセッツ総合病院婦人科客員教授（兼任）（留学）
- 昭和 63 年 9 月 防衛医科大学校産科婦人科学講座教授
- 平成 13 年 3 月 防衛医科大学校定年退官
- 平成 13 年 4 月 埼玉医科大学産婦人科客員教授
- 平成 13 年 11 月 防衛医科大学校名誉教授

名誉会員

- Honorary member of Society of Gynecologic Surgeons（平成 10 年 3 月～）
- 日本産科婦人科学会名誉会員（平成 13 年 5 月～）
- 日本思春期学会名誉会員（平成 13 年 6 月～）
- 日本婦人科手術学会名誉会員（平成 13 年 12 月～）
- 日本婦人科腫瘍学会名誉会員（平成 13 年 12 月～）
- 埼玉県産婦人科医会名誉会員（平成 13 年 12 月～）
- 骨盤外科機能温存研究会名誉会員（平成 25 年 7 月～）、他

現在の役職

- 防衛医学振興会理事（平成 24 年 4 月～）
- 日本女性骨盤底医学会監事（平成 24 年 6 月～）
- 埼玉医科大学女性骨盤底医学センター顧問（平成 24 年 8 月～）

シンポジウムⅠ

「コミュニケーションとしての性を教える」

座長 金子由美子

公立中学校養護教諭・『季刊セクシュアリティ』副編集長

包括的セクシュアリティ教育における「コミュニケーション」

田代美江子

埼玉大学教育学講座

包括的セクシュアリティ教育の中で「コミュニケーション」がどのように位置づいているのかを確認することで、「コミュニケーションとしての性」ということ、その学習のあり方について根本的に考えてみたい。

1990年代後半以降、「性の権利」は様々な形で再確認され、それを実質的に保障する具体的取り組みとしてセクシュアリティ教育の重要性も強調されてきている。2009年、ユネスコによって出された『国際性教育実践ガイドンス』（以下「ガイドンス」）は、セクシュアリティ教育の重要性およびその具体的方向性と内容を示す国際文書として重要な位置をしめるものである。「性の権利宣言」（2014年版）では、セクシュアリティは「生涯を通じて人間であることの中心的側面をなす」ものとされ、「喜びとウェルビーイング（良好な状態・幸福・安寧・福祉）の源であり、全体的な充足感と満足感に寄与するもの」であるとされている。こうしたセクシュアリティ概念を基礎におくのが「ガイドンス」である。

「ガイドンス」が提示する6つの具体的学習領域で第1にあげられているのが「人間関係」であり、ここからも、セクシュアリティ教育の中心課題として関係性が重視されていることがわかる。また、第2領域の「価値観・態度・スキル」の中に「コミュニケーション、拒絶、交渉のスキル」という項目があげられており、「すべての人が自分の意見を表明する権利を持っていること」を前提に、「人間関係においてコミュニケーションは重要であること」の理解から学習はスタートしている。

「コミュニケーションとしての性」を、例えば「暴力としての性」と対置させて学習することも可能かもしれない。しかし、セクシュアリティ教育においては、セクシュアリティを「喜びとウェルビーイングの源」とする点から出発し、その実現のための学習として人間関係について具体的に学び、その関係を良好なものとするためにコミュニケーションについて学ぶという構造になっている。これは、テーマ主義的な性教育のあり方のイメージとは異なる性の学習を模索していくことにつながるものでもある。

【プロフィール】

埼玉大学教育学部教授・埼玉大学男女共同参画室男女共同参画推進部主査。

“人間と性”教育研究協議会代表幹事、『季刊セクシュアリティ』副編集長。

その他、行田市男女共同参画推進協議会会長・さいたま市男女共同参画推進協議会委員・さいたま市雇用対策推進計画審議会委員、埼玉県人権教育推進協議会委員、わだつみ会（日本戦没学生記念会）理事、子どもと教科書全国ネット21代表理事などをつとめる。

専門分野はジェンダー教育学、日本教育史。特に、近現代日本における性教育の歴史、ジェンダー・セクシュアリティ平等と教育をめぐる諸問題を主な研究テーマとしている。現在は、東アジアにおける性教育研究に取り組んでいる。主な著書は、『ジェンダー・フリーの絵本⑥学びのガイド』（編集、大月書店、2001年）、『ジェンダーと教育の歴史』（共著、川島書店、2003年）、『新版人間の性と教育①性教育のあり方、展望 日本と世界、つながりひろがる』（共編、大月書店2006年）、『こんなに違う！世界の性教育』（共著、メディアファクトリー、2011）、『ハタチまでに知っておきたい性のこと』（編著、大月書店、2014）など。

なぜ、いま、生きる力を育む性教育が求められているのか

岩室紳也

ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）

健康づくりの分野では、IEC の重要性は古くから言い伝えられている。すなわち Information（情報）をどれほど Education（教育）しても、増えるのは Knowledge（知識）で、その知識を活かすには Communication（対話、関係性、絆などを通じたコミュニケーション）が重要で、IEC がそろってはじめて Life Skill（生きる力）が身に着くとされてきた。しかし、性教育の分野では未だにインターネットの影響で性情報が氾濫し、望まない妊娠や STI が増えていると思い込み、教科書も読まずに、知識伝達型の性教育を行っている人が少なくない。

かつては性のトラブルは保健医療現場のみならず学校現場でも共有されていた課題であった。しかし、いま、若者たちが直面している課題は関係性や居場所の喪失、コミュニケーション能力、生きる力の低下であり、それらの結果、性の様々な問題（十代の人工妊娠中絶の減少、梅毒と HIV/AIDS を除く STI の減少、MSM 間での STI の増加、間違った男性のマスターベーションの増加、膣内射精障害、セックスストレスなど）だけではなく、こころの問題（不登校、引きこもり、自殺、他殺など）が表出してきている。

このような状況だからこそ、性という、本能に裏打ちされた、誰もが等しく直面する 2 次性徴ときちんと対峙し、受け止め、それを仲間づくり、コミュニケーションのきっかけづくりにできるような性教育に加え、一人ひとりが生きる力を、コミュニケーション能力を育むための環境整備が求められている。若者たちのニーズに応える性教育とは、事例や当事者の生の声、経験談、失敗談に加え、関係性に基づいた、自分事意識の話であり、トップダウンの押しつけ、あるべき論ではない。性教育は性の諸問題を解決するための手段ではなく、人づくり、人育て、さらには一人ひとりの幸せづくりの手段となることが求められている。

【プロフィール】

履歴

- 1955年8月13日生まれ
- 1981年 自治医科大学卒業
- 1981年～ 横浜市立市民病院研修医
- 1983年～ 神奈川県立青野原診療所
- 1986年～ 神奈川県立がんセンター泌尿器科、津久井保健所
- 1988年～ 神奈川県立厚木病院泌尿器科、津久井保健所
- 1990年～ 神奈川県秦野保健所、県立厚木病院泌尿器科
- 1996年～ 神奈川県秦野保健所、県立厚木病院泌尿器科、県衛生部医療整備課
- 1997年～ 神奈川県鎌倉保健所、県立厚木病院泌尿器科、県衛生部医療整備課
- 1998年～ 神奈川県平塚保健所、県立厚木病院泌尿器科
- 1999年～ 神奈川県厚木保健所保健予防課長、神奈川県立厚木病院泌尿器科医長
- 2003年4月～ (社)地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長
厚木市立病院泌尿器科
- 2014年4月～ ヘルスプロモーション推進センター(オフィスいわむろ)代表
厚木市立病院泌尿器科

著書

- イマドキ男子をタフに育てる本(日本評論社)
- ママもパパも知っておきたい よくわかるオチンチンの話(金の星社)
- 思春期の性 ーいま、何を、どう伝えるかー(大修館書店)
- エイズ ーいま、何を、どう伝えるかー(大修館書店)
- 思春期の性と心と向き合おう(日本家族計画協会)
- 他人事じゃないエイズ(日本家族計画協会)
- OCHINCHIN おちんちん(日本家族計画協会)

心地よさを伝えるコミュニケーションが性を育む

やまがたてるえ

NPO 法人 JASH 日本性の健康協会

性という言葉聞いて、抱くイメージは多様な現実。そのなかで、どのように「性」を伝えるか。その答えになるものが「コミュニケーション」と思い、日々の講演会活動でもコミュニケーションワークを取り入れながら、性についてお話しをさせていただいております。

性という文字を紐解けば「心」と「生きる」というように、生きること、心を育むことに切って切り離せないものになっています。その心を育むという部分において、日々の暮らしのなかで経験していくものが、創り上げている部分があります。

性の諸問題の根っこに「コミュニケーション不足」を多く感じています。実際に日本の教育現状のなかでも「コミュニケーションとして学ぶ」という機会がほとんどありません。日々の対人関係の中で生まれるものをしっかりと見つめなおすことで気づける部分があると考えます。リアルボイスを届けて当事者の声を届ける JASH の活動もまたリアルなコミュニケーションで繋がる気づきの力を感じています。

今回のシンポジウムではコミュニケーションワークを取り入れながら体験を通して感じるものをお伝えしたいと思っています。特に言葉を越えたノンバーバルコミュニケーションについて心理学者マレービアンは話す内容は7パーセントで、あとのコミュニケーション情報は顔の表情 55% 声の質（高低）、大きさ、テンポ、38%という実験結果を出しています。伝える側の言葉を越えた「思いを伝えたい」ということが受け取る側への心の変容を起し、そして行動変容にもつながるものと考えています。古い大和言葉で「目合ひ（まぐわい）」という言葉があり、それは「sex」を意味しているといわれています。目を見てコミュニケーションをする大切さを伝えることが性を教えることに繋がると考えています。

【プロフィール】

バースセラピスト 助産師 看護師 NPO 法人 JASH 性の健康協会理事

地域での育児相談を中心に産前産後の母子への支援活動を行っています。またセラピストとして、セラピーやカウンセリングなども行っています。初経教育の本執筆（13歳までに伝えたい女の子の心と体のこと）をきっかけに、小学校、中学校、高校、保護者向けに性の健康教育の講演活動をしています。また性について悩みを持つ女性とのお話し会なども開催し、女性に寄り添う活動も行っております。

性感染症予防は2つのコミュニケーションから

高橋幸子

埼玉医科大学地域医学・医療センター

性感染症予防の為に必要なコミュニケーション力という言葉には2つの意味がある。「性行為を行う当事者どうしのコミュニケーション」という意味と「性教育を行なう者どうしのコミュニケーション」という意味である。

性感染症予防・避妊の為には自分でできる方法と相手の協力が必要な方法があり、相手の協力を得る為にはコミュニケーション力が必要になってくる。性感染症の予防には4つの方法がある。1. HPV ワクチン・HBV ワクチン 2. コンドーム 3. 清潔 4. リセット検査。このうち、2～4では相手の協力が必要である。避妊法は1. 低用量ピル 2. 子宮内避妊具 3. 基礎体温法 4. コンドームがあり、やはり4では相手の協力が必要になる。外部講師である医療従事者が行う講演では「いかに当事者意識を持たせるか」が重要である。講演の中で伝える方法としては「感染広がるゲーム」や性感染症経験を持つ医学生が高校生宛に書いた「医学生からの手紙」が非常に有効である。

しかし、実際に性行為を行うという場になったときには、知識だけでは身を守ることができない。相手に上手に協力を求めるコミュニケーション力が必要になるが、講演の時間内で交渉力まで身につけさせるには限界がある。

ここでもうひとつのコミュニケーション力が必要になる。性教育を行なう者どうしの協力、「役割分担」である。医療従事者による講演会のみで完結する事なく、以下の4つを積み重ねて行うことが必要である。1. 性犯罪から身を守ること 2. 豊かな性 3. つながってきた・つないでゆくのち 4. 性感染症・避妊。それぞれのテーマについて得意とする職種も異なる。交渉力を高めるためのロールプレイなどは少人数で行う方が良いでしょう。

異なる職種のものどうしがコミュニケーションをとり役割分担することにより、二重・三重に性のトラブルから身を守る知恵を与えられる。性教育を行うもの同士が積極的に連携してゆくことが思春期の子どもたちを守るための近道なのではないかと考える。

シンポジウム I-4

【プロフィール】

山形大学医学部卒業

〈職歴〉

2001年 埼玉医科大学総合医療センター 研修医

2003年 埼玉医科大学病院 産婦人科入局 助教に就任

2013年 埼玉医科大学 地域医学医療センター 助教を兼務

〈資格〉

日本産婦人科学会認定 産婦人科専門医

〈所属学会〉

日本産科婦人科学会

日本母性衛生学会

日本思春期学会

性感染症学会

日本公衆衛生学会

〈委員〉

彩の国思春期研究会 副会長

彩の国思春期研究会西部支部 会長

性教協さきたまサークル 理事

〈外来診療〉

埼玉医科大学 産婦人科 思春期外来

日本家族計画協会クリニック

松田母子クリニック

〈非常勤講師〉

埼玉県立大学 非常勤講師

女子栄養大学 非常勤講師

埼玉医科大学短期大学 非常勤講師

十文字学園 校医

シンポジウムⅡ

「エ・アロール ～ 中高年からの性を謳歌する」

座長 堀口貞夫
主婦会館クリニック

前立腺とセクシュアリティ

永井 敦

川崎医科大学泌尿器科

団塊の世代が後期高齢者を迎える 2025 年問題が迫っています。少子超高齢化社会の日本では、若い世代に経済的側面を含めすべてを頼るゆとりはありません。医療保険制度についても高齢者の負担がますます増えていくでしょう。その中で、高齢者は健康で自活し、社会的にも貢献していくということが重要となります。そのような意味で、アンチエイジングということが大切なキーワードとなってきます。しかし、ここで中高年男性に立ちほだかる壁が前立腺の諸問題です。

国立がん研究センターによると男性の 2015 年のがん罹患数予測では、前立腺がんが胃がん・肺がんを抜いてトップに立ちます。同死亡数予測では 6 位ですが、この統計が意味することは、前立腺がん罹患する男性が増え、治療介入された前立腺がんサバイバーが増加するということです。がんは制御されても、手術によって勃起機能を失う男性が増える可能性があるということです。また、進行前立腺がんでは抗男性ホルモン療法が施行され、結果として性機能障害を招きます。単なる男性の性交や性行動の障害だけでなく、カップルとしてのセクシュアリティの問題が発生します。勃起と射精で構成される男性の性行動にとって前立腺はとても重要な臓器です。前立腺がん治療における性機能の問題について真剣に取り組まなければなりません。

また、前立腺は 50 歳を超えると肥大が始まります。前立腺肥大症は勃起障害のリスクファクターです。動脈硬化などの血管障害によっても下部尿路症状の悪化が認められます。この前立腺肥大症やそれに伴う過活動膀胱を治療することによって下部尿路機能や勃起機能が改善します。2014 年に前立腺肥大症治療薬として PDE5 阻害薬が保険適用になり、中高年男性の排尿機能の改善ならびにアンチエイジングにも広く貢献できるようになりました。カップルがいつまでも性を謳歌できる時代が到来したと言っても過言ではありません。

シンポジウムⅡ-1

【プロフィール】

現職：川崎医科大学泌尿器科学教室 教授

昭和 57 年 岡山大学医学部医学科卒業

平成 6 年 岡山大学医学部附属病院助手

平成 15 年 4 月 岡山大学医学部・歯学部附属病院泌尿器科講師

平成 18 年 1 月 16 日～川崎医科大学泌尿器科学教室 教授

もっと知ってほしい自分の、相手の、「からだと心」。 年はとっても大切な生と性。

堀口雅子

女性成人病クリニック、主婦会館クリニック

更年期近い女性の「からだと心」に関心を持ち診療を開始した頃感じたことは、性に関し言葉にできぬ人、性の問題を知らず・気づかぬ人、本人もサポーターである夫・パートナー・家族も無知であること etc. であった。しかし、最近は、積極的に語り対処する女性が増えたが、男性は以前からの古い感覚のままのように思われるが、如何であろう。

性に関する問題は、卵巣・精巣から分泌される性ホルモンの働きに基づくが、年齢と共にこれ等の分泌が減少するための出来事（性交痛・性欲低下・性交拒否 etc.）が出現する。性腺の働きをコントロールする脳の中枢からの性腺刺激ホルモン分泌も老化により変動し心身のアンバランスを起こしやすい。周囲の理解と支援が必要である。

肉体的なこれらの変動の他、環境等、精神的なものの影響も大きい。年齢と共にホルモンも低値に落ち着き、ホルモンと関係なく、心地よい生き方を選び、性はコミュニケーションの一つとして大らかなものに変わる人もいれば、揺れ動き周囲を巻き込む人もいる。

平均寿命は、2012年（女 86.41、男 79.94）から2014年（女 86.83、男 80.50）と報告され、近年、男性寿命の伸びがみられる。今までと異なる視点での対策が必要であろう。多くの高齢者は単身者として様々な老後を過ごすことになる。個人で・集団で生活する場合、高齢者の性は、各人様々であることを認知し、当事者も・介護する家族・施設の人とも未知の分野を学ぶ必要があるかと思う。

産婦人科・心理療法の領域からセクシュアリティに関わるメンバーで2002年以降『カラダと気持ち』と題し中高年のセクシュアリティ調査をしてきた。単身・配偶者に関し、①近年のセックスレス化、②単身者の規範意識、③夫婦間の2002年以降の関係性、③性生活の内容、④性機能の男女差・満足度・障害度・年代差・時代差・国際性 etc. である。

これ等の調査を参考に中高年の性を語り、「各人が周囲を理解し、自己を理解する」ことに役立てればと思う。

【プロフィール】

現職；産婦人科医

主婦会館クリニック（からだと心の診療室）：思春期・更年期・老年期女性（含むGID）

主婦会館・ティーンズ・カフェ：からだと心の相談室（ボランティア）

女性成人病クリニック（更年期）：副所長

助産師学校：講師・校医

講演：中学・高校・大学（生徒、保護者）・保健所（性教育・思春期・更年期・老年期）

学歴・職歴

1949年 東京薬学専門学校（現東京薬科大学）卒。その後～53年 東京大学医学部
薬学科（現薬学部）にて性ホルモン研究

1960年 群馬大学医学部卒。

1961～68年 東京大学医学部産科婦人科学教室にて研修。

1970～90年 国家公務員共済組合連合会・虎の門病院，主任医員・医長として勤務。

1990～2000年 虎の門病院（思春期外来）で非常勤、勤務。

所属学会：日本産科婦人科学会・日本性感染症学会・日本性科学会・日本思春期学会 etc.

所属団体：「性と健康を考える女性専門家の会」「高齢社会をよくする女性の会」

“人間と性”教育研究協議会

著書

日本性科学会雑誌；Vol. 32suppl. 2014；2012年・中高年セクシュアリティ調査特集号

『もっと知りたい自分のからだ、思春期の月経』監著、少年写真新聞、2008)

『更年期障害、これで安心』編著、(小学館、2009)

『更年期を卒業した貴女に贈る、シルバーエイジの健康BOOK』（保健同人社、2008）『カラダと気持ち』（三五館、2007)

『基礎体温のこと』共著（十月舎、2010)

『夫婦で読むセックスの本』堀口・堀口（NHK出版、2008）etc

中高年の性—アンケートと臨床現場から

金子和子

日本性科学会カウンセリング室、主婦会館クリニック

性のありようは社会の変化とともに変わる。セクシュアリティ研究会が2000年と2012年に行ったに行った「40代—70代のセクシュアリティ調査」とでは、大きく変わった側面と、変わらなかった側面が浮き彫りになった。大きく変わった点は、どの年代においても既婚者の配偶者間のセックスストレス化が進んだことと、家庭の重要度が薄まった(離婚願望の高まり、性の重要度の低下等)ことなどである。一方変わらなかったのは、男性と女性で性に関する要望が大きく異なることパートナーがいる単身者の性行動の方が、既婚者の性行動より活発であること、などである。

アンケートとは別に、臨床現場で感じることは(性嫌悪という疾病項目はDSM-5では、消えたが)性嫌悪の増加である。ことに、女性でそれを強く感じる。これは、女性が自分が望まぬ性行為を拒否する結果、パートナーとの関係の中で問題となり、相談に来所することが多い。セックスストレスも、かつての、男性が拒否するというのばかりではなく、近年は女性の性交拒否によるものが増加してきていることを考えると、この性嫌悪の増加が、何らかの形でアンケートにも表れるかと期待したがそれはなかった。アンケートと、臨床現場で見えるものが違うと言えよう。性嫌悪の増加は、来所者の主訴という形で、数字に表れる。しかし数字には表れないが、これまでになかった相談や、無視できぬ流れ等も見られる。認知症のパートナーとのセックスや、単身中高年女性の閉経後のセックスについての相談等はそれらに入るのであろう。

こうしたことから、アンケートと現場でおきていることの両方を見て、中高年の性の現状と流れを見たい。

【プロフィール】

臨床心理士

早稲田大学第一文学部哲学科心理学専修卒業 相模原友愛病院心理室勤務を経て
1976年より2009年まで日本赤十字社医療センター勤務。

2010年より日本性科学会カウンセリング室、主婦会館クリニック 勤務

専門は、性、思春期。

日本性科学会理事

共著書：[セックス・カウンセリング入門]（金原出版） [心と体の性科学]（星和書店）

[カラダと気持]（三五館）他

中高年の性的活動性

岡垣竜吾、永田一郎、佐藤加寿子、仲神宏子、新澤 麗、石原 理

埼玉医科大学産科婦人科、埼玉医科大学女性骨盤底医学センター

今回の学会では、日本における性的活動性の低下、特に若年者と高齢者における性的活動性の低下（不活発化）をテーマとしている。

我々は、超高齢化社会に対応して、日本の高齢者が人間として豊かに暮らしていくには、「性的活動」は重要な因子であると考えている。中高年の QOL を良好にするための 9 つの因子という概念があり、①よく食べられる。②よく寝られる。③排便・排尿が容易である。④肉体的・精神的苦痛がない。⑤心理的に安定している。⑥性行動に支障がない。⑦職場、家庭、学校などにおいて十分役割を果たしている。⑧家族とともに生活をエンジョイしている。⑨人生を十分満足しているとされている（永田、2003年）。

産婦人科領域からの視点として、近年、骨盤臓器脱・尿失禁治療の治療において、「機能再建手術である」ということが提唱され、術前後の排尿機能や排便機能の変化については、質問紙や各種排尿機能検査等によって評価が行われるようになってきた。しかし、「性機能の再建」ということに関し全く poor な状況にある。

当院女性骨盤底医学センターでは、受診した女性の性的活動性に関する問診を行っているが、閉経前後から性交渉が全くないご夫婦が多く、交渉があるのは 60 代でも 10% 以下である。また、性機能に関するより詳細な評価として、PISQ-12 等海外で使用されている質問紙を日本語訳したものをを用いることを検討しているが、性交渉そのものがないため評価が成立せず、骨盤臓器脱の状態が性機能に与える影響、術前後の変化についても、全く評価ができていない状況である。また、当院の女性骨盤底医学センターを受診した 80 代女性の約半数は夫と死別しており、パートナーと離別・死別した後の性生活という問題もあると推定される。

渡辺淳一作「エ・アロール」は高齢者男女が共同生活をする高級マンションを舞台に、マンションを経営する医師が、「自由な性を謳歌できる、老人の理想郷を作ろう」として苦闘する物語であるが、日本の道徳感では高齢者が性的活動を行うことそのものが社会的禁忌と見做されており、同作品に描かれるようなパートナーに限定されない性的活動は想定範囲外ともいえる。まずは「中高年の性というテーマについて話し合う姿勢を持つ」「ポジティブな方向性で話がしうるということを示す」または「この領域は置き去りにされてきたことを自覚する」ことから始まるのではないであろうか。シンポジウムに参加される諸子の意見を伺いたいと考える次第である。

【プロフィール】

1983年 灘高等学校 卒業

1989年 東京大学医学部 卒業

1996年 東京大学大学院 卒業

2000年 National Institutes of Health (米国) 留学

2002年 埼玉医科大学産科婦人科 講師

2012年 埼玉医科大学女性骨盤底医学センター センター長

2014年 埼玉医科大学産科婦人科 教授

一 般 演 題 I

座長 中塚幹也
岡山大学大学院保健学研究科

1. 新生仔雌マウス脳での遺伝子発現解析による性別違和（性同一性障害）関連遺伝子の探索

仲地 豊¹⁾、伊関美緒子¹⁾、横尾友隆²⁾、水野洋介³⁾、岡崎康司^{1) 3)}

¹⁾ 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター トランスレーショナルリサーチ部門

²⁾ 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター 実験動物施設

³⁾ 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター ゲノム科学部門

性別違和（性同一性障害、以下GD）は、性自認と身体の性別の不一致を特徴とする。思春期前後の若年GD当事者への医療介入は慎重な判断が必要とされ、迅速かつ正確な診断のためのGDバイオマーカーの同定が強く望まれる。そこで我々は主にモデル動物によるゲノム科学的解析からGD関連遺伝子の探索を進めている。哺乳類の脳の性差は性ホルモンによって胎仔期～新生仔期（性決定の臨界期）に誘導され、特にヒト脳では分界条床核などで見られる組織学的な性差が身体の性別ではなく心の性別とよく一致することが知られている。さらにヒト双生児研究などからGDには遺伝的な背景があると示唆する報告もあり、GDには社会的要因だけでなく生物学的なメカニズムも存在すると考えられている。そこで脳の性決定の臨界期にプロピオン酸テストステロン（以下TP）を投与してホルモンの影響を攪乱させた雌の新生仔マウスを用いて遺伝子発現解析をおこなった（Nakachiら J Sex Med 2015;12(4):887-96）。TP投与により臨界期の雌マウス脳で特異的に顕著な発現変化を示す約300の遺伝子を同定したが、興味深いことにこれらの遺伝子の大部分は通常雌雄で発現差がみられない遺伝子であった。またこの遺伝子群をもちいた配列解析から、この時期には主にアンドロゲン受容体ではなくエストロゲン受容体による発現制御がおこなわれていることを示唆する結果が得られた。これらの結果から、これまで未同定だった数多くの遺伝子が時期特異的な発現調節を受けて脳の性分化に寄与していることが予想された。また我々のグループでは現在GD当事者ゲノムをもちいたゲノム配列解析も進めており、モデル動物による解析とともに今後GD機序解明とバイオマーカー開発の重要な知見が得られると考えられる。

2. 慈愛会今村病院泌尿器科における性同一性障害外来の現況

内田洋介

慈愛会今村病院泌尿器科

当科は2013年10月に開設した。開設以来2015年7月までの22ヶ月で当科を受診した性同一性障害当事者(疑いも含む)は23名であった。内訳はMTF 4名、FTM 19名であった。初診時の年齢は12～51歳(中央値 25歳)、MTFは12～34歳(中央値 22.5歳)、FTM 15～51歳(中央値 24歳)であった。受診動機はホルモン治療16名(MTF2名、FTM 14名) 診断をどこで受けて良いかわからないための相談が6名(MTF 2名、FTM 4名) 診断のための身体的診断 1名(FTM)であった。受診時既にSRSを施行済みであったのは6名(すべてFTM)であり、うち5名は戸籍変更も終了していた。鹿児島県においては性同一性障害の診断の専門医療機関がなく、当事者はどこを受診したらよいか苦慮している。また医療側のガイドラインの理解も進んでおらず、ガイドラインに沿った治療がなされていない例も経験した。

3. 性同一性障害小児の自覚と、大人のかかわり

田中里湖、田中絵里緒

●おぼろげな自覚

- ・保育園の年長の時、中学の制服（スカート）を見て、女子がイヤだと感じた。
- ・色鉛筆でほかの色は減っているのにピンクが減らないなあと思った。
- ・プリキュア、アイカツとか女子向けの番組は見たくもなかった。ひらひらスカートとか、目がキラキラして気色悪い。おままごとも気色悪い。女の子言葉が嫌い。「〇〇よ。」とか言わないといけないからイヤ。

●はっきり自覚へ

- ・入学時、祖母が赤いランドセルを買ってくれた。この時は自分が赤を買ってといった。
- ・1年の夏休み、韓国の祖父母宅でテコンドーを習う。殴ったり蹴ったりが楽しかった。
- ・テコンドーをきっかけに、スポーツ用ジャージ・Tシャツ等を2-3セット買い揃え、以後ずっと着まわす。鏡を見て、黒ジャージ上下に赤いランドセルが「全然似合わない。」と思う。
- ・2年の秋、七五三の女子着物を母に勧められ、着たくないと思った。
- ・陸上のクラブで、女子の列に入っても恰好を見て男子に行けと言われてたり、女子トイレで変な目で見られたりいやな思いをすることが多くなった。

●親へのカミングアウト

- ・小学2年の冬、中学ではスカートの制服はイヤ、男になりたい、と母に勇気をもって話す。母が調べて、福岡の当事者団体や、各種機関にアクセス。

●自己肯定感の養成

- ・できるだけ、大人の当事者に会う。FTM の中でも性格・手術の有無など様々。それぞれの生き方、自分らしく、と考えられた。
- ・大阪の康純先生に受診。はじめから「りこくん」と呼ばれて自信が持てる。
- ・文科省の2015年通達が出た。学校では配慮が得られ、2学期から転校先で男子扱いとなる。

●皆さんへ

- ・FTM の場合は、「活発な女の子」としか思わず、本人の意思やSOSを見逃してしまうことが多いと思われる。冒頭に記載したような些細なことから、周囲がキャッチしてほしい。

一 般 演 題 Ⅱ

座長 永尾光一

東邦大学医学部泌尿器科

東邦大学医療センター大森病院リプロダクションセンター

4. Aging が性的活動、勃起機能、性的自信に及ぼす影響 —日本人男性 7710 人におけるインターネット調査による横断的研究—

木村将貴¹⁾、永尾光一²⁾、寺井一隆¹⁾、斎藤恵介¹⁾、井手久満¹⁾、武藤 智¹⁾、
山口雷蔵¹⁾

¹⁾ 帝京大学医学部附属病院泌尿器科、²⁾ 東邦大学大森病院リプロダクションセンター

背景

近年、本邦においては他国に類を見ない急激な高齢化が問題となってきた。しかし、高齢者にまつわる性というものを詳細に研究した例は少ない。今回我々は、インターネットによる全国調査を実施し、詳細な性活動、性機能、性に対する自信のデータを得たので、加齢がこれらのパラメーターにどのような影響を与えるかを中心に検討した。

対象と方法

本邦にて 2009 年 3 月から 5 月の間に、20-89 歳までで構成される男性 7710 人に対して全国的な web-based cross-sectional survey を行った。質問内容は勃起機能の評価として EHS (Erection hardness score)、飲酒喫煙などの生活因子、既往歴、自己申告における主観的健康感、性的な自信、自慰や性交渉などの性的行動の頻度、PDE5 阻害薬の使用の有無、ED の治療に対する態度から構成した。

結果

全 7710 人の平均年齢は 39.3 歳であった。Aging と勃起機能に関しては、加齢に伴い EHS スコアは減少していた。Aging と主観的健康感については、若年と高年齢層に健康感の上昇を認めた。Aging と性的活動の関係に関して、マスターベーションは年齢とともに減少傾向であったが、性交渉については大きな減少は認めなかった。全体のうち 1182 人 (15.3%) は PDE5 阻害薬の使用していた。Aging と共に性的な自信は減少する傾向を認めたが、それに反比例して PDE5 阻害薬の使用が増加していた。興味深いことに多変量解析で勃起機能等を調整した結果、加齢が性的自信の要因の一つとして挙げられた。

結語

今回の Web 調査から、65 歳以上男性の半数以上が性的活動を保っていたことが明らかになった。また、勃起機能、性的自信は年齢とともに低下していたが、PDE5 阻害薬の使用もそれに伴って上昇していた。高齢者といえども積極的に PDE5 阻害薬を使用し、勃起機能と性的自信を高めていることが予想された。

5. フラクショナル炭酸ガスレーザーによる 閉経関連性器尿路症候群 (Genitourinary Syndrome of Menopause-GSM-) の治療 (第1報)

関口由紀、中村綾子、槍沢ゆかり、大林美貴、矢尾正祐

女性医療クリニック LUNA グループ・LUNA 骨盤底トータルサポートクリニック、
横浜元町女性医療クリニック LUNA、横浜市立大学大学院医学部泌尿器病態学講座

(緒言) 閉経前後から女性ホルモンの低下により外陰膣萎縮(Vulvovaginal atrophy-VVA-)が起こり、このため膣乾燥感、痒み、灼熱感、疼痛、性交疼痛、尿漏れなどの閉経関連性器尿路症候群(Genitourinary Syndrome of Menopause-GSM-)が起こる。一般的には治療には、女性ホルモンの経膣投与が用いられるが、女性ホルモンを使用することができない疾患もある。経膣的なフラクショナル炭酸ガスレーザーの照射は、GSMを軽減する治療である。2014年にDEKA社のフラクショナル炭酸ガスレーザーによるGSMの治療が米国食品医薬品局により承認している。

(目的) Jeisys社の炭酸ガスレーザーEdge oneによるフラクショナル炭酸ガスレーザー膣照射装置In Shapeの安全性とGSMおよび膣のゆるみ感を含む性機能に関する有効性を検証した。

(方法) 膣全長にわたり全周性にフラクショナル炭酸ガスレーザーを1か月間隔で2回照射した。主要有効性項目は、「膣弛緩なし」をスコア4以上とするVSQ(包括的評価質問票)とした。二次的有効性項目としては、膣弛緩評価(VALI)、FSFI(女性性機能評価)、FSDS-R(女性性的苦痛評価)、ICIQ-SF(国際尿失禁症状問診票)、OABSS(過活動膀胱問診票)、IIQ7(国際尿失禁QOL問診票)の各合計点の変化率とした。また膣健康指数、膣圧に関しても1、2、3、6ヶ月後に評価した。(結果) 2015年4月までの施行した患者数は、8名であった。有害事象は、施術中の膣口付近の強い疼痛を1名が訴えたが、他の7名に関しては、許容できる膣不快感であった。また施術直後に軽度膣出血が2名に認められた。

3か月後または6か月後の経過観察が終了している4名に関しては、全員が膣の締め感が改善したと答えた。

6. 二分脊椎男性のセクシュアリティ

道木恭子¹⁾、小野敏子²⁾、土居悦子²⁾、野田洋子³⁾、足立久子⁴⁾

¹⁾ 帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科

²⁾ 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科、³⁾ 摂南大学看護学部

⁴⁾ 岐阜大学医学部看護学科

【はじめに】

二分脊椎男性のセクシュアリティに関する研究は少なく、性機能および性行動に関する詳細は明らかにされていない。本調査は、セクシュアリティの現状について知ること、支援の必要性を検討するために、2014年度科研費の助成研究である「思春期から性成熟期にある二分脊椎男性のセクシャル/リプロダクティブヘルス/ライツに関する教材開発」の一環として実施した。今回、二分脊男性の性機能と性行為に対する現状を検討した。

【方法】

研究協力者は二分脊椎男性 13 名である。方法は、9 名に半構成的面接法、4 名にフォーカスグループインタビュー法を平成 26 年 6 月から平成 27 年 5 月にかけて実施した。本研究は茨城県立医療大学倫理審査の承認を得た。

【結果と考察】

研究協力者 13 名の年齢は 15 歳から 40 歳で、うち既婚者は 4 名であった。勃起に関しては 13 名中 9 名が「ある」と答え、4 名からは回答が得られなかった。勃起の状態については、「触った感覚はないが触ると大きくなる。でも、すぐに普通の状態に戻ってしまう」「頭で興奮しても、それが勃起にはつながらない」状態であった。また、勃起のある人のうち 7 名は射精可能であるが、「尿か射精かよくわからない」という状態で、そのため「射精しそうな感じになると尿便失禁をとまなうことがある」という人もいた。性行為については、体位がとりづらい、尿便失禁などを問題としてあげ、「失禁が怖くて、途中でやめている」という人もいた。一方、「達する感覚はないが、自分なりの満足感が得られればいい」という人もいた。

性機能、性行動に関する情報の必要性については、「必要な情報が、必要なときに得られることが望ましい」という声がきかれた。今後もさらに調査を継続し、性の支援の在り方について検討を重ねていきたい。

7. Persistent Genital Arousal Disorder (PGAD) の一例

早乙女智子

神奈川県立汐見台病院産婦人科

Persistent Genital Arousal Disorder (PGAD) は性欲と関係なくオーガズムが頻繁に起こる稀な疾患で、海外でも報告例は散見されるものの定形的な治療法も確立されていない。

症例は、初診時 31 歳 既婚 1G0P。19 歳のとき、クリトリスが過敏であることを主訴として産婦人科を受診。パキシル、ドグマチール服用するも症状は不変。28 歳ごろからヤーズを服用開始して症状はやや軽快。大腿内側の痛みや頭の中に響くびくびくする感じが耐えがたく治療困難として当院を紹介された。大学病院産婦人科での MRI では陰部に明らかな腫瘍なく、器質的な疾患としての Tarlov cyst は否定的。10 代からストレスが溜まると自慰をしていたが、17 歳頃から自慰行為をした翌朝に陰部のけいれんのような感覚があり、授業中に触れなくても快感が起こるようになる。18 歳のとき脳外科で MRI を受けるも脳腫瘍等の異常なし。

当院初診時の診察では、クリトリスが 3 mm 程度包皮から露出している他は特に所見はなかった。美容外科でクリトリス周囲にボトックス注射を受け、かえって症状が悪化。リリカ、メイラックス、ヤーズで対処。症状の身体化が起きていると思われたので、刺激を避け継続的な服薬を勧めた。マスターベーションをしたり、服薬を自己中断しては症状が悪化。夫の理解や支えもあり、カウンセリングや頻回のメール相談で徐々に症状は緩和している。改善していると告げると、その後悪化するので精神的な影響は否定できない。親に対する憎悪があり、親からの虐待が示唆されるが、過去を思い出すことが怖い。最近、性交はできるようになったが、妊娠を考えると症状の悪化を見る恐れもあり、服薬中止は慎重に相談しながら行う予定にしている。国内ではこの疾患や状態が知られていないことから、当事者が適切な医療機関に辿り着いていない可能性があり、発症頻度は不明である。

一 般 演 題 Ⅲ

座長 北村邦夫
一般社団法人日本家族計画協会

8. 集団保健指導（性教育講演会）の重要性と成果

金子明美

公立高等学校養護教諭

1. はじめに

私は、心に響く性教育を20年以上研究している。現在、高等学校養護教諭として11年目を迎えた。性教育講演会実施にあたっては、性の学習を科学的に捉える視点を基礎とし、生徒からの事前アンケートを集計分析してその結果導き出されたものから話を構成している。

今回の発表では、性教育が「寝た子を起こす」のではなく、「慎重な行動を選択する傾向」になることを統計から考察したいと考えた。

2. 仮説

授業または講演会などで「性教育を受けたことがある」と答えた生徒は、「受けたことがない」と答えた生徒よりも、誤った情報に振り回されることなく、慎重な判断をするのではないかと仮定した。

3. 調査期間と対象者

平成25年2月から12月 中学3年生 337名

平成23年6月から平成27年6月 高校生 874名

4. 統計結果と考察

(1) 中学3年生対象アンケート集計結果から

性の情報はどこから得たかの質問に対して、「授業・講演・医学書」に○を付けたグループとそれ以外に○をつけたグループを分け、正解率、性のイメージ、性感染症の予防方法が書けたかを比較したところ、どの項目も有意差があった。正しく情報を得た生徒の方が、そうでない生徒に比べて、性は心と体の健康問題としての考え方の基礎を学んだのではないかと思われる。

(2) 高校生対象のアンケート結果から

性教育講演会を「受けた」グループ、「受けていない」グループの2つに分け、「高校生の性交」に対して、どのように考えているかを集計した。考え方を4つ「積極的」、「思考的（中間派）」「慎重」「無関心・無記入」に分けクロス集計したところ、講演を受けたことがある生徒の方が「より慎重な考え」であることが分かった。「性感染症予防法を書きなさい」の項目でも講演を受けた生徒の方が正解率が高かった。

*有意差を示すデータについては発表の際に説明する。

5. 終わりに

今回の調査は、性教育講演会実施の成果を示すデータであり、集団保健指導（性教育）を進める上で、今後の励みになった。子どもたちには、わい談と性教育の違いを見極める力をつけ、情報の選択と正しい判断ができる豊かな知性と感性を育ててほしい。今後も生徒の実態とニーズに真摯に向き合い、科学的な視点を基に、心に響く性教育を目指していきたい。

9. ライフサイクルをみすえた生と性健康教育を目指して

山崎真子

松田ウイメンズクリニック

【目的・方法】

昨今、性教育に対して「寝た子を起こすな」的な考え方や、政治の介入、文部科学省指導要綱による制限等により、性教育の授業時間数・内容ともに乏しく、正しい性への知識を知る機会・意識のあり方を考える機会が少ない。しかし、その反面、性を売り物にした性産業の歪んだ情報が氾濫・蔓延しているのが現状である。

また、よくありがちな性教育として、命は尊いものとしての美化論・神秘論や、SEXはまだ早いとする制限論、避妊法としての技術論で、性を語る傾向にある。

私は、「生=大切な命：これから生きていく」「性=自分の性・パートナーの性：これから新たな命を育む可能性がある」との考えから『生と性健康教育』と捉え、ライフサイクルを見据えた性教育=自分で自分の人生を選択できるよう正しい性への知識を深め、更には意識のあり方について子どもたちに語るようにしている。

H26年度、講話依頼のあった中学生と指導者（教諭・養護教諭・助産師）の知識・意識の把握のために講話の（前）（後）アンケート調査を行ったので報告する。

【対象者】

中学生：〈前：1256名〉〈後：1256名〉

指導者（教諭・養護教諭・助産師）：〈前のみ：100名〉

保護者：〈前のみ：43名〉

【結果・考察】

中学生は、将来結婚したい・子どもが欲しいとの意識は高いが、妊孕性・性感染症・勃起・マスターベーションに対する知識はかなり乏しい。

指導者の知識レベルは高いものの、実際本当に理解しているかは疑問が残るところである。その裏付けとして、産める時期を43歳以上と回答している割合は40%と高い。ちなみに、保護者も44%と高かった。

我々医療従事者が外部講師として、生徒のみならず指導者・保護者に対しても正しい知識を普及し、かつ、繰り返し伝えていくことが、将来を見据えた人生の選択、さらには不妊予防につながると考える。

10. 看護学生における同性愛者に関する意識調査 Nursing Students' Attitudes towards Homosexuality

TU Yi-Ning¹⁾, SUZUKI Kazuyo²⁾

¹⁾Department of Human Health Science School of Medicine, Kyoto University

²⁾Midwifery School of Aichi Medical Association

Although the Japanese Nursing Association indicates that nurses should treat patients equally with different sexual-orientations, there are no guidelines in clinical to provide specified care with nurses and only few studies about teaching nursing students with these issues in Japan. The purpose of this study was to disclose nursing students' attitudes toward homosexuality in Japan and to explore influencing factors toward their attitudes.

Wada's Attitudes toward Homosexuality Scale and Ishimaru's studies were used. 228 nursing students from all grades answered the questionnaire in September, 2012. This study has been approved by the Ethics Committee of Medicine School of Nagoya University. The average scores of nursing students' attitudes were positive. However, 27% of students' attitudes toward lesbians with psychological intimacy factors was negative, and 28.2% (n=64) for the case of gays. With nonparametric test, attitude toward gays was lower than lesbians within a nursing student ($Z=2.401$, $p<0.025$). Clinical nursing students ($p<0.01\sim0.001$), or students who have LGBT friends ($p<0.01\sim0.001$) are high scored with others toward lesbians and gays. Only 2 clinical nursing students attended LGBT patients in their practices. Routes of receiving LGBT knowledge are also be inquired. Most of sexuality-related information received from mass media (75.5%), with 43.2% from friends and 38.4% from internet. Less than 20% of nursing students received LGBT knowledge from schools. Scores from whom only received LGBT information via mass media was lower than others ($p<0.01$) and shows that they're confused between homosexuals and transgenders. Scores with receiving LGBT information from schools didn't show significant differences.

This study presented the situation of nursing students' attitudes and invisibility toward homosexuals today in Japan.

1 1. 妊孕性や生殖医療に関する教育に対する養護教諭の意識

山縣末佳¹⁾、大廣香織¹⁾、長本摩耶¹⁾、難波早織¹⁾、中塚幹也^{2) 3) 4)}

¹⁾ 岡山大学大学院保健学研究科博士前期課程、²⁾ 岡山大学大学院保健学研究科

³⁾ 岡山大学病院産婦人科、⁴⁾ 岡山県不妊専門相談センター

ライフプランの中で、子どもを持つかどうかは個人の自由であるが、自由な選択肢を持つためには、年齢と妊孕性との関連や生殖医療の倫理的課題に関する知識を持つことが前提となる。学校教育の中での情報提供や啓発は、知識や考える契機を得るために有用である。このため、その中心となる可能性のある養護教諭における妊孕性や生殖医療に関する教育に対する意識を調査した。

2014年7～9月、養護教諭350名に、同意のもと無記名自己記入式質問紙調査を行い、182名から回答を得た（回収率52.0%）。

「女性の妊娠率が低下し始める年齢」に対して、「40歳以上」の年齢を回答した者は27.9%、「女性が自然に妊娠できる年齢」に対して、「45歳以上」の年齢を回答した者は42.1%であった。妊孕性や生殖医療に伴う各種の倫理的課題に関して、「学校で教えることが必要」との回答率をみると、「妊娠の成立」98.8%、「年齢上昇と生殖機能の低下」86.1%、「不妊の原因」85.4%、「体外受精」60.9%、「精子や卵子の凍結保存」51.6%、「精子や卵子の提供」50.6%、「代理出産」51.3%であった。しかし、「教えることができる」との回答は、「妊娠の成立」90.5%、「年齢上昇と生殖機能の低下」51.8%、「体外受精」26.8%であり、「教えたことがある」との回答は、「妊娠の成立」46.2%、「年齢上昇と生殖機能の低下」5.9%、「体外受精」1.2%と低率であった。また、約9割の教員が、産科医や助産師などの講演やパンフレットなどの資料を希望していた。

妊孕性や生殖医療に関する教育の必要性を感じている養護教員は高率であり、専門的な知識のある産科医や助産師などが積極的に支援することで、さらに学校で取り上げる機会が増える可能性がある。

1 2. HPV ワクチンに関する大学生の意識と報道の影響

吉村沙耶佳¹⁾、花口裕美¹⁾、横田 泉²⁾、肥後沙也子²⁾、嶋田雅子²⁾、
林田桃子²⁾、薬師地仁美²⁾、宮崎寛子³⁾、吉海歩実³⁾、片岡久美恵⁴⁾、
中塚幹也^{4) 5)}

¹⁾ 岡山大学病院看護部、²⁾ 岡山大学大学院保健学研究科博士前期課程

³⁾ 倉敷平成病院看護部、⁴⁾ 岡山大学大学院保健学研究科

⁵⁾ 岡山大学病院産婦人科

HPV (Human papillomavirus) ワクチンによる子宮頸がんの予防効果が期待され、世界保健機関 (WHO) は接種を推奨している。しかし、2013 年に「ワクチンとの因果関係を否定できない副反応」の報道があり、厚生労働省は「積極的に勧奨すべきではない」としている。今回、大学生の HPV、HPV ワクチンに関する知識と報道以降の意識を調査した。

2014 年 6～7 月、A 県内の大学生 462 名 (医療系学生 414 名、非医療系学生 48 名) を対象に、同意のもと、無記名の自己記入式質問紙調査を施行した。

性教育の中で「HPV・HPV ワクチン」について教わったとの回答は 37.4%であり、「HIV・エイズ」83.8%や「クラミジア」51.3%などの感染症と比較して低率であった。自身が子宮頸がんにかかることが「心配」との回答は女性の 78.6%に見られた。HPV ワクチン接種に関する社会情勢についての認知度は、「副反応の報道」71.8%、「厚労省が積極的推奨を差し控えていること」58.3%、「WHO は推奨しており、多くの先進国で実施されている」40.0%、「日本産婦人科学会などは推奨の再開を訴えている」19.3%であった。

HPV ワクチンを接種していない 275 名のみで検討したところ、「HPV ワクチンに対して関心がある」との回答は、報道前は 53.9%、報道後は 76.6%、「HPV ワクチンに対して不安がある」との回答は、報道前は 21.5%、報道後は 75.3%と上昇していた。「HPV ワクチン接種推奨を再開すべき」との回答は 65.1%に見られ、そのために必要と思うことは、「情報公開」85.6%、「副反応の早期診断・治療を行う体制」67.0%、「副反応があった場合の治療費の給付」57.6%が挙げられた。

副反応の報道以降、HPV ワクチンへの不安は上昇していたが、子宮頸がんを心配する女性も多く、今後の政府の対応を見守るとともに、学校でも子宮頸がん検診の啓発を行う必要がある。

協力団体・医院一覧

(五十音順 敬省略 広告掲載企業も含む)

一般社団法人埼玉県医師会
医療法人きずな会さめじまボンディングクリニック
医療法人社団康知会富岡産婦人科医院
医療法人社団五の橋産婦人科
医療法人社団葉山産婦人科
医療法人社団マウナケア会清水病院
医療法人善淳会小川産婦人科・小児科
エーザイ株式会社
株式会社大塚製薬工場
科研製薬株式会社
株式会社明治
埼玉県産婦人科医会
バイエル薬品株式会社
久光製薬株式会社
フェリング・ファーマ株式会社
富士製薬工業株式会社

2015年8月1日現在

ご協力をいただき、誠にありがとうございました。

日本性科学会雑誌（第33巻2号）

平成27年9月7日発行

発行責任者：日本性科学会 理事長 大川玲子

学会事務局：〒113-0033 東京都文京区本郷3-2-3 森島ビル4F

編集責任者：第35回日本性科学会 会長 石原理

大会事務局：〒350-0495 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38 埼玉医科大学産科婦人科学教室

担当：鈴木元晴

印刷 ヨーコー印刷株式会社

〒350-0451 埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷 52-1
